

柳田国男監修国語教科書にみられるメディアとコミュニケーション教育 1950年代検定初期『新しい国語』（東京書籍，1950～1951）を対象に

著者	渡辺 通子
雑誌名	東北学院大学教育学科論集
号	1
ページ	1-16
発行年	2019-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024016/

柳田国男監修国語教科書にみられるメディアと コミュニケーション教育

—— 1950年代検定初期『新しい国語』
(東京書籍, 1950～1951)を対象に ——

A Study on Communication Education Using Media in Japanese
Language Textbooks Published by Yanagita Kunio in the 1950's

—— Focusing on the Japanese Language Textbook Series
“Atarasii Kokugo” ——

渡辺 通子

WATANABE Michiko

キーワード：柳田国男，国語教科書，単元学習，コミュニケーション教育，
1950年代，初等言語教育

Key words : Yanagita Kunio, Japanese Language Textbook, Unit Study, Communication Education,
Primary Japanese Language Arts

1. 本研究の目的

本稿の目的は、1950年代に成立した柳田国語科では、新しいメディアとして登場したラジオを使って、コミュニケーション教育をどのようにして実現しようとしたのかを明らかにすることである。分析対象は、検定第一期国語教科書である柳田国男監修『新しい国語』（東京書籍）である^{註1)}。具体的には、単元「ラジオ」（3年下）をコミュニケーション教育のひとつとしてとりあげ、ラジオを使って、どのような授業が想定されていたのか、指導方法と学習方法の特質を検討する。同単元は、上級学年に同じテーマの発展的教材「放送を聞く」（4年下）が配置されており、ラジオを使った指導として、発達段階に配慮した系統性がみられる。

なお、本稿では、コミュニケーションを「言語（非言語を含む）を媒介とする人と人との関わり」、コミュニケーション教育を「人との関わり方を含めた言語能力を育成する教育」と定義する。また、柳田国男の話し言葉教育論を中心とする柳田の言語観、国語科目的、国語科カリキュラム、指導方法論に関する一連の理論的言説と、それに基づいて編集され

た国語教科書及びその関連資料を含めて「柳田国語科」と呼ぶことにする。

2. 単元「ラジオ」（3 年下）を取りあげる理由

本単元を取りあげる理由は、第一に、柳田のラジオへの関心、第二に、学習指導要領（試案）に取り上げられていること、第三に、当時のコミュニケーション研究の時代的背景の3点である。

（1）柳田のラジオへの関心

柳田（1947）が子どものための世間教育を構想する際、交通と通信はキーワードの一つであった^{註2）}。柳田民俗学の分類は、第一に衣食住、第二に交通、第三に節日、第四に口の芸術、言語芸術を挙げる。このうち直接、国語科にかかわるとされる言語芸術として挙げるのは、歌、諺、謎である。これ以外の日常にかかわる言語の教育のありかたについては、衣食住、交通、節日との関連でなされるべきという考えであった。その意味において、柳田国語科は、柳田社会科と密接不離の関係にある。

柳田は、郵便制度とともに、当時、急激に普及したラジオにも関心を示した。本人自身のラジオ出演も早く、1922（大正11）年のラジオ放送開始直後に放送出演、以後も積極的出演し、ラジオの大衆性と共に、言語能力としての聞くことに着目していた。本教科書においても、手紙や郵便に関する教材、ラジオと放送に関する教材（「ラジオ」（3 年下）、「放送を聞く（1）子牛（放送劇）（2）放送局の見学（3）ことばの音」（4 年下））、新聞作りの教材（「学級新聞を作ろう」（4 年下））が採択されている。

（2）学習指導要領試案にみるラジオを使った指導

ラジオに関する学習は、『22 年度版学習指導要領国語科編』（以下、22 年度版と表記）に、「（四）話し方学習指導上の注意」事項のひとつとして取り上げられている。また、『26 年度版学習指導要領一般編』には、国語科の諸目標達成のために、「聞くこと」は最も基本的な言語活動であるとして、「ラジオのプログラムを選んで聞いたり、よい映画を選んでみる習慣や態度の指導」も含むことが明示されている。

22 年度版を改訂した『26 年度版学習指導要領国語科編』（以下、26 年度版と表記）に新たに設けられた「国語能力表」（第3章第3節）の中に、「聞くこと的能力」として、第2学年「2 放送を聞いて楽しむことができる（1-3）」が示されている。また、単元学習例（第4章 国語学習指導の具体的展開例）として、第6学年の例に「学校新聞を編集しましょう」がある。目標の一つに「15 新聞やラジオ放送を注意深く読んだり、聞いたりする態度が

できてくる」を挙げる。以上のように、22年度版、26年度版とも、学校における新聞やラジオの活用が促されていた。マス・メディアを国語の授業に導入することが政策的に進められようとしていたのである。

(3) コミュニケーション研究

わが国におけるコミュニケーション研究は、戦後初期に、鶴見俊輔ら思想の科学による「コミュニケーション講座」開講にその端緒をみることができ（渡辺，2004）。その後、鶴見（1969）はメディアをコミュニケーションの乗り物と名付け、コミュニケーションの変容をメディアの発達との関係からとらえる^{註3)}。鶴見（1969）によれば、やがて、1952（昭和27）年頃になると、コミュニケーション研究は、マス・コミュニケーション研究にすり替えられていくという経緯を持つ。国語教育研究もその影響を少なからず受けることで体系の再編成がなされた^{註4)}。

戦後の新教育で目指されたコミュニケーションのための国語教育とは、その中心は専ら話し言葉教育を積極的に導入することにあつた。だが、22年度版小学校用に新聞編集が取り入れられたこと、中学校用に示された単元学習に新聞の活用が示されたことにみられるように、新聞やラジオなどのマス・メディアを活用する、マス・コミュニケーション教育と名付ける方がふさわしいともいえる内容を含んでいた。国語教育でも同様に、話し言葉教育に代表される対面コミュニケーションと、マス・メディアを活用するマス・コミュニケーション教育とが明確に分類されずに混在したまま進められていたのである。

3. 柳田国語科におけるコミュニケーション教育

柳田国語科において、コミュニケーション能力の育成のために、最も重視するのは、心で思ったことを話せるようにすることである。話せるようになれば、書くことも自ずとできるという指導観をもっていたからである。

低学年では語彙指導を重視する。中高学年では、子どもの自治活動という実の場を仮想した言語活動を統合する学習へと発展する。また、ラジオや新聞などのマス・メディアを取りあげた教材が導入されるようになる。これらは、話すことの指導から書くことの指導への接続を意図する教材ともなっている。コミュニケーションの能力を、低学年で想定される家族や友だちと係わったり話したりする力だけでなく、多くの友だちと話し合い、学級や学校を変えていく自治能力の要素として機能するととらえるようになる。その際、新しいメディアであるラジオを教具として使うことで、学校の外も学びの場となり、異世代とのコミュニケーションを可能にするという意図である。

3-1 単元構成と単元構想（3つの小単元）

（1）単元「ラジオ」（3年下）の単元構成と単元のねらい

単元「ラジオ」の構成と文種は次の通りである^{註5)}。

- 「(一) 学校放送で作文を聴取したこと〔随筆・記録〕」
- 「(二) 家庭でのおじいさんとの対話〔劇〕」
- 「(三) ラジオについての感想や意見〔随筆・記録〕」

『新しい国語』学習指導の研究（1945. 以下、指導書と表記）では、本単元を「ラジオという文化的な機械を取り上げ、新教育の方向づけをしている教材」とする。ラジオが備える教育性を取りあげ、「ラジオの聞き方」という単元を設定した単元学習と位置づける。以下に示した引用（同. 15-27）からは、本単元の意義は、第一に、ラジオなどのメディアを導入することで国語教育の場は学校内（教室）に限定されず、家庭や社会に及ぶこと（「単元の意義」）、第二に、リテラシー（読み書き）のみならず、見る聞くを重視する国語教育が目指されたことに見いだせる。

従来は目からばかり特に文字を主とした文化財を取り入れることに努めていたが、最近、ラジオのように耳からも児童の文化を取り入れ、子供の肉となり血となるような栄養を吸収するようになったことはたいへんよいことである。（中略）この点から考えて、私たちの教育的配慮を家庭にも社会にもひろげていかなければならない。「校外ノート」とでもいうべきノートを各自に用意させて、校外における視覚によって受けるもの（映画）、聴覚によって受けるもの（音楽・ラジオ等）あらゆる事象を記録して、生活勉強に供したいと思う。

また、ここで用いられる生活勉強という語に着目したい。この語は本教科書で出色の教材とされる「学級文庫」にも用いられており、社会科「ラジオについてしらべる ― 聴取りの調査など」との関連を図りながら、話す聞くの表現学習を取り入れた学習を想定したものである。つまり、生活勉強とは、国語科が他教科（主として社会科）との関連を図りながら、読む書くの文字言語の学習だけでなく、積極的に話す聞く見る音声言語による学習を展開していくことで、子どもたちの現実の生活に資する言語教育を意図したものといえよう。

加えて、第三に、国語教育の目的を子どもの社会化に重点をおこうとしていた点が読みとれるのである。

(2) 単元「ラジオ」(3 年下) 単元構想

3 つの小単元の内容は次のとおりである。

・「(一) 学校放送で作文を聴取したこと」

場面設定は、国語の時間である。

「きょうは みんなで 作文の ほうそうを 聞こう。そして、あとで、かんそうを みんなで 話し合おう」という先生の指示のもと、ラジオ放送を視聴する。学校放送では、「金魚」「おふろ」「秋」という題の子どもの作文が放送された。その後、「さあ、これから みんなで かんそうを いって ごらん下さい。」という先生の指示により、子どもたちは感想を話し合っ、て、「金魚」を一番に選ぶ。(資料 1 参照)

・「(二) 家庭でのおじいさんとの対話〔劇〕」

本文は、祖父と孫(おじいさんとあきらさん)の対話文である。

自宅に帰ると、あきらさんが聴いた学校放送を、祖父も家で聴いていたので共通の話題となる。あきらさんは祖父の質問に答えながら、学校での授業の様子を説明する。

祖父の質問は、「何を聞いたか」、「先生の質問に何と答えたか」、「どこで聞いたか」、「どの作文をよと思ったか」、「どんな放送が好きか」である。二人のやりとりはラジオへの興味づけをしながら相手に伝える要点を示すものとなっている。さらに、この対話を通して、祖父の質問内容が作文を書く際の要点となることを学べる編集となっていて、小単元(三)との接続が意図される。

【資料 1】「二 ラジオ (一)」教科書本文

<p>「二 ラジオ」(一)</p>	<p>朝、目が さめると 明かるく 晴れた 空が 見えま した。にわの かきの 木に、まっかに うれた かき の 実が、つやつやと 朝の 日ざしを うけて いま した。</p>	<p>ぼくは いつものように 元氣 よく 学校へ 行き ました。三時間目が 国語の 時間でした。先生が ラ ジオを かけて くださいました。</p>	<p>「きょうは みんなで 作文の ほうそうを 聞こう。 そして、あとで、かんそうを みんなで 話し合おう。」 そう、いって 先生が ラジオの スイッチを いれ ました。すると 音楽が 聞えて きて、まもなく 学 校ほうそうが はじまりました。</p>	<p>一ばん はじめは 金魚と いう 作文 でした。 金魚 わたくしの うちには、今 五ひきの 金魚が かつ て あります。去年の 夏、おとうさんに 買って い ただいたのです。略</p>	<p>金魚は さむく なると あまり えさを たべなく なります。そして 冬に なると 金魚は ちの 底の 方に じつとして います。わたくしは そんな 時 には 死ぬの ではないかと 心配で たまりません。</p>	<p>二ばん目は おふろと いう 作文 でした。 おふろ ぼくの うちでは 一日おきに おふろを わかし ます。おふろ場は いどの 近くに あります。略</p>	<p>三ばん目は 秋と いう 作文 でした。 一台の ラジオを かこんで 三年生の ぼくたちは みんな いっしょけんめいに 聞きました。 学校ほうそうが 終ると、 「さあ、これから みんなで かんそうを いって ごら ん下さい。」 と、先生が おっしゃいました。みんなは かんそうを 話し合いました。</p>	<p>一ばん よい 作文は 金魚に きまりました。</p>
-------------------	--	--	--	--	--	--	--	-------------------------------

・「(三) ラジオについての感想や意見〔随筆・記録〕」

本文は「ラジオ」という題の作文である。

「ぼくはラジオが好きです。ラジオはいろいろなことを知らせてくれます。野球のほうそうはほんとうに見ているように知らせてくれます。」の書き出しで、天気予報を例にラジオの利便性について述べている。最後に、子ども放送局を望む内容でまとめている。

4. 単元「ラジオ」の指導計画

4-1 ラジオを使った社会的・生活的な学びの実現

【表1】は、指導書（1949）に示された各小単元の指導計画について、目標、授業展開、言語活動を表にまとめたものである。（筆者作成。表中「展開」内の点線は、導入→展開→発展ごとの区切りを示す。）

指導書では、3つの小単元の文章観を、「そっくりそのまま子供たちへの文例として適当なもの」だとする。特に、小単元（一）は、「記録文の中に聴取した作文を挿入した新しい趣向の文章」であり、「これからの实际生活に役立つもの」だとする（15-27）。

【表1】にある目標及び展開を検討すると、本単元で設定された目標は、第一に、ラジオというメディアの積極的導入による実生活と結びついた社会的・生活的な学びの実現、第二に、聞くことの学習から多様な形式の書くことの学習への移行という2点である。

社会的・生活的な学びの場を実現するために、学びの場として、小単元（一）（三）は学校での学習、小単元（二）は帰宅後の対話を通じた学習が描かれている。ラジオ放送の聴取が学校での学びを家庭において復習するという役割を果たしている。学校と家庭の双方が学びの場として設定されている。ラジオ放送は生活に密着したものとして、かつ学習材としても機能している。このことによって、必然的に子どもの学びの場が拡大されている。

聞くことの学習から多様な形式の書くことの学習へ移行させるために、小単元（一）では、ラジオを聞く時にどんな点に注意して聞かかという聞き取りの学習と同時に、記録文の書きかたの学習が想定されている。小単元（二）では、（一）と同様の観点を踏まえた対話の学習と同時に、台本につながる対話文の書きかたの学習が想定されている。小単元（三）では感想文の学習が想定されている。

【表1】単元の流れのうち、小単元（一）展開の④の「聞き方のけいこ」、小単元（二）展開の④の「対話のけいこ」の学習活動には、ラジオ放送を使った話し言葉の指導の具体が示されている。柳田の主張である話すことの指導から書くことの指導への接続を示した単元となっている。それをどのように行おうとしたのかを明らかにするために、これら2つの学習活動に検討を加える。

【表1】 単元「ラジオ」の指導計画

小単元	文種		内 容	言語活動
(一) 時間配当 5 学校放送 で作文を 聴取した こと	記録文 (ラジオを 聞いた子 供の作文)	目標	放送から、どんなことを聞き取ったか、聞き取ったことをどんなに書き表しているかを調べる。話し合いをすることで話し方のけいこをする。学校放送を聞くことで、放送のけいこをしたり、聞いたことをまとめたりする。	
		導入	① 放送一般についての話し合いをすることで、ラジオについて学ぶことの動機付けをする。	話し合い
		展開	② 全文((一)～(三))を黙読で通読し、読み取った結果を話し合う。 ③ (一)を黙読し、金魚」「おふろ」「秋」の3つのうち、どれが一番よいと思うかを話し合う。 ④ 文の内容をつかむように、聞き方のけいこをする。 ⑤ 文としての見方味わい方の学習をする。 本文では、「金魚」が一番人気があったが、それはなぜか調べる。(この文のどこがよいか、どんなに詳しく、生き生きと書いてあるか)	(黙読) 話し合い 聞き方 話し合い
(二) 時間配当 4 家庭での おじいさんとの対話	対話文	目標	1. ラジオを聞いたことの話し合いができるようにする。 2. 本の材料を使って、対話の稽古をさせる。そして話し方がうまくなるようにする。	
		導入	① 学校でラジオを聞いたことを家に帰ってから、家族と話し合ったことがあるか等についての話し合いをする。 ② 教科書の挿絵について話し合いをする。	話し合い 話し合い
		展開	③ 黙読 ④ 相手を決めて、教科書を見ながら対話のけいこをする。	対話
		発展	⑤ 国語の時間の学習を校内の「子供放送局」で放送して批評してもらおう。 ⑥ 会話だけの文章を書く。	放送 台本
(三) 時間配当 5 ラジオに ついての 感想や意 見	記録文 (散文形式)	目標	ラジオを聞いて感想文を書き、ラジオ聴取の感想日記を記録する態度と能力を身につける。	
		導入	① ラジオ、映画、読書についての感想文を書いたかどうか実態調査をして、該当の子どもに朗読、話をさせる。 ② 挿絵についての話し合いをする。	話し合い
		展開	③ 読みの目あてを決め、あきさんのラジオについての考えを黙読によって読み取り、まとめる。 ④ ③で読み取ったことを話し合う。	話し合い
		発展	⑤ ラジオを聞いたことを作文に書く。 ⑥ 学校放送設備を利用して、子どもの感想文や詩、劇を校内放送する。	作文 校内放送

(筆者作成 ゴシックは筆者註)

4-2 小単元(一)「作文を学校放送で聴取したこと」の展開と目標・方法

ー 聞くことの指導から書くことの指導への接続

(1) 「聞き方のけいこ」にみる目標と方法

小単元(一)「学校放送で作文を聴取したこと」(時間配当5時間)は、【表2】のような学習展開を想定している。【表3】に詳細な目標と単元展開を示した。

目標は、「どんなことを聞き取ったか、聞き取ったことをどんなに書き表しているか」を調べ、「話し合いをさせることによって話し方もけいこさせる」ことである。話す聞く

【表2】 単元「ラジオ」（3年下）小単元（一）「作文を学校放送で聴取したこと」学習の流れ

導入：① 放送についての話し合い ② 教科書の挿絵についての話し合い 展開：全文通読 → 読後の話し合い → (一) の文の中でどれが一番よいかの話し合い → 聞き方のけいこ → 文の見方味わい方についての話し合い

（筆者作成）

書く読むの言語活動を総合的に行うことが意図されている。

そのうち特徴的であるのは、聞くことの指導方法として「聞き方のけいこ」を提示する点である。本書でいう「聞き方のけいこ」とは、聞き取りの学習である。その方法とは、「黒板ふきを棒の先に付けて、それをマイク代わりにして、その前に、地の文を読む子供と、作文を読む子供とを立たせて、ラジオ放送のまねをさせる」という簡単な疑似体験をさせるだけではあるが、模倣の楽しさを加えている。

（2） 聞くことの指導の5つの「目あて」と指導方法

指導書「(一) の取り扱い」では、実際の教室では、「これらの文を読ませてみて、どれが一番よいと思うか、^{ママ}各の学校でためしてみるという学習は意外にも興味をわき立たせるのではあるまいか」と解説する。続いて、「文の内容をつかむように、聞き方のけいこをさせてみる。」として、以下に示した5つの「目あて」を提示する。ここでの「目あて」とは、目的というより、聞き取りの際の要点ともいえるべきものである。

- | |
|---|
| 1 この 文を 書いた 子ども（あきらさん）が おきた時の、お天気の よう
すはどうでしたか。
2 何を 見ましたか。
3 学校で ラジオを 聞いたのは、何時間目ですか。
4 どんな 作文を 聞きましたか。
5 どの 作文が 一ばん よいと 思いましたか。
(この間に対する答が出たら、それはなぜであるかということを、みんなで調べ
させる) |
|---|

聞くことにも文章読解と同様に、いつ、なにを、どのように、といった聞き取りの要点があることを示し、その内容を考え、選択する学習が想定されている。

（3） 話す聞くの指導から書くことの指導への接続

本単元にみる聞くことの指導方法の特徴として、① ラジオ放送を聞きとる要点の確認

【表3】 小单元（一）「作文を学校放送で聴取したこと」目標及び単元展開

□目標

（一）の文は、ラジオを聞いた子供が、記録した文の形になっている。純粹に聞き取って書いたとすれば、すばらしい速記力で聞き取ったことを書いたのであるが、そこは窮屈に考えないで、放送の作文が新聞やラジオのテキストなどにのっていたのを利用したと考えてもよい。

「ここでは、どんなことを聞き取ったか、聞き取ったことをどんなに書き表わしているか。」ということ調べ、なお、話し合いをさせることによって話し方もけいこさせる。実際にいろいろな学校放送を聞いて、放送のけいこをしたり、聞いたことをまとめさせたり、いろいろな活動をさせる。

□単元の展開（配当時間：5時間）

	展 開	留意事項
学 習 活 動	導 入 1 放送一般についての話し合い。 （1） ラジオのある家調べ （2） ラジオ放送では、何を一番よく聞くか。 （3） 何が一番面白いか。 （4） ためになることがあるか。 2 教科書の挿絵についての話し合い。	ラジオに対する態度をよりよくするためによりよくラジオについて学びとる意欲を喚起する
	展 開 1 黙読による通読 ＜目あての提示＞ （一）の文ではどんなことが書いてあるか。 （二）の文ではどんなことが書いてあるか。 （三）の文ではどんなことが書いてあるか。 2 提示された読みの5つの「目あて」（略）にしたがって読み取る。 3 聞き方のけいこ ・地の文を読む子どもと作文を読む子どもに役割分担をしてラジオ放送のまねをする。 ・聞く方の子どもは、教科書を伏せ、聞き取ったことを書くためのノートのみ開く。 訓練されていれば、鉛筆でメモを取りながら聞く。 そうでない場合、後で頭に残ったことを書くようにする。 ・聞き取ったことについて、本文を読み、聞き取りの正否や精粗等について話し合う。 4 文としての見方味合い方について話し合う。（読むことによって学習する）。	（一）～（三）の目あてにそって文の内容をつかめるようにする。 聞き取ることがらは抜き書きしておく。 聞き方と書きかたの両面から話し合う。
評 価	アチーブメントテスト 略（要約のみ） （1）（2） 漢字学習 （3） 文法学習（助詞） （4） 比喩表現 （5）（6） 短文作り	
ドリル 学習	略	

（筆者作成）

（何、どこ、どのように） ② ラジオ放送の教材を、話すことの模範的な内容と文体をもつものとして読む（聞く） ③ 聞きとったラジオ放送を範例にして文章を書くという一連の流れが想定できる。

単元「ラジオ」の内容は、話すこと聞くことの発展学習としての書くことの学習につながる規範性を備えたものとして子どもに提示される。つまり、ラジオ放送は、教科書と同様、模範的な話し言葉の文章を示す役割を果たしている。ラジオというメディアを扱うことに

よる指導方法の大きな変化は、音声によるという点である。理解から表現へと学びを発展させるという考え方は、文字言語教育における方法と変わらない。

4-3 小单元（二）「家庭でのおじいさんとの対話」展開と目標、方法

(1) 「対話のけいこ」にみる目標と方法

小单元（二）「家庭でのおじいさんとの対話（劇）」（時間配当4時間）は、【表4】のよ
うな学習展開を想定している。【表5】に詳細な目標と単元展開を示した。

【表4】 単元「ラジオ」（3年下）小单元（二）「家庭でのおじいさんとの対話」学習の流れ

導入：① ラジオについての家族との話し合いの様子についての話し合い
② さし絵についての話し合い
展開：黙読 → 学級全体で代表二人による対話の稽古 → 二人ずつ組になって 対話のけいこ → 発展学習

（筆者作成）

目標は、① ラジオで聞いた内容について話し合いができるようにすること、② 本文を使って対話のけいこをすることで、話し方がうまくなることの2点である。話し合いと対話の学習を主とする。

本文は、祖父と孫（おじいさんとあきらさん）の対話文である、自宅に帰ると、あきらさんが聴いた学校放送を祖父も家で聴いていたため、共通の話題となる。あきらさんは祖父の質問に答えながら、学校での授業の様子を説明する。（ア）「何を聞いたか」→学校放送、（イ）「先生の質問に何と答えたか」→ほくも上手に書きます、（ウ）「どこで聞いたか」→教室で、（エ）「どの作文をよと思ったか」→金魚、（オ）「どんな放送が好きか」→野球放送といった対話が展開される。（「」は祖父の質問、→はあきらさんの回答）

対話を通して、文章を書く際の骨子となることを学ぶ内容となっている。

指導書「予想される学習活動」では、（一）との関連を持たせ、次のような学習活動を設定している。

- 1 黙読によって、読めるかどうか試してみる。
- 2 相手を決めて、本を見ながら対話のけいこをする。
- 3 暗記をしたら、クラス全体で代表者を選出して行う。
- 4 二人ずつ組になり行う。

始めは、教科書を見ながら練習し、暗記したら「純然たる対話のけいこをさせ、わざとらしくない自然の状態において対話させる」。「自然のうちに身ぶりなどが出てくるのは、

【表 5】 小単元（二）「家庭でのおじいさんとの対話」目標及び単元展開

□目標

1. ラジオを聞いたことの話し合いができるようにする。
2. 本の材料を使って、対話のけいこをさせる。そして話し方がうまくなるようにする。

□単元展開（配当時間：4 時間）

		展 開	留意事項
学習活動	導入	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学校でのラジオを使った学習について、家庭での扱いの実態の話し合い。 (1) 学校でラジオを聞いたことを帰宅後に家族と話し合った経験があるか。 (2) あったとすれば、どんな内容か。 2. さし絵についての話し合い 	
	展開	<ol style="list-style-type: none"> 1. 黙読 2. 相手を決め、教科書を見ながら対話のけいこをする。 1 回目 クラス全体で 3. 暗記をしたら自然な対話のけいこをする。 2 回目 代表者 2 名による 3 回目 二人ずつの組による 	<ul style="list-style-type: none"> ・読めるかどうかを確認する。 ・最初は教科書を見ながら対話させる。暗記したら純然たる対話のけいこにする。 ・わざとらしくない自然の状態に対話させる。
	発展	<p>【発展Ⅰ】 放送設備のある学校では、国語の学習での成果を校内放送で放送する。 他の子どもたちへの効果としたり他の子どもたちによる批評を行う。</p> <p>【発展Ⅱ】 これまでの散文や記録的文章以外に、会話だけの文章のけいこをする。 劇の脚本や放送のための台本や紙芝居の台本等を書く時の基礎的学習とする。</p> <p>○方法Ⅰ. 次のような相手を決めて会話をする。 (1) お母さんと子ども (2) そのほかの家族と子ども (3) 友達との間 (4) 先生との間</p> <p>○方法Ⅱ. 鉛筆筆談 二人一組になって紙の上に鉛筆で筆談しながら話を運ぶ。 作文力をつける基礎的学習として位置づける。 心にあることを自由に発表できる自由さがある。</p>	<p>放送担当との連携</p> <p>表現形式を増やす。(脚本や台本)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音声言語による談話形式の学習 ・筆記による表現力育成の学習
評価		記載なし	

(筆者作成)

好ましい」とする。子どもの発達を捉えた指導で、教科書を使った対話学習から自然な状態の対話に導いていくものである。

(2) 発展学習としてのロールプレイと鉛筆筆談

指導書では、発展学習として、校内での学校放送に発展させること、また、文章表現形式を増やすことの 2 点を挙げ、後者の方法として次の 2 例を紹介する。

(1) 母と子、家の人と子供、友だち同士、先生との間など、役割を決めて会話する

(2) 鉛筆筆談

「鉛筆筆談」を対話指導の進歩的指導方法として、以下のように紹介している^{註6)}。

方法(1)は、ことばによる談話であるが、子供の筆による表現力を伸ばす方法として、鉛筆対談という面白い方法がある。この方法は、子供ふたりが一組となって、一枚の紙の上で鉛筆で対談していくのである。もし、劇を見たら、その感想をひとりが相手に聞く、鉛筆で答える、それを相手にやる。相手はそれに答える。そして話を運ぶのである。これは、子供の日常のことばで話が運ばれるので、作文力をつける基礎的な学習ともなるし、心にあることを、何ものからもせきとめられずにすらすらと発表できるという自由さがある。この方法は、千九百四十八年ごろから、進歩的な国語教師によって実験されていて、大変効果が多い。

鉛筆対談によって期待できる効果として、第一に、子どもがペア学習を行うことで、友人同士で相手意識が促され表現意欲が喚起されること、第二に、日常の言語を用いて書くので表現意欲が抑制されないこと、第三に、書くことへの能力向上につながることの3点を指摘する。

これは、話し言葉の学習がしっかりできれば、書くことの指導はそんなに難しいことではないという柳田の主張につながる方法のようにもみえる。だが、この学習では、対談によって話すべきことを書くことで代替しているという点で同じとはいえない。口頭による表現をうながすために、文字表現が手段として用いられているとみるべきであろう。

一方で、心に思ったことをそのまま文字にしていくという点においては、話し言葉の学習を文字による表現学習につなぐ指導方法としての側面も併せ持つといえる。心に思ったことをそのまま文字にしていくことができるのだから柳田の主張につながる方法である。話す聞くから書くへと発展させる過程にもちいる有効な指導方法と捉えられるが、柳田の意図に添う方法であるかどうかは検討の余地がある。

なお、ラジオを取りあげたテーマを4年生対象に発展させた単元に、「放送を聞く」(4年下)がある。本単元は3つの小単元で構成されている。小単元(1)「子牛(放送劇)」は放送劇のシナリオであることから朗読の学習が想定される^{註7)}。

小単元(2)「放送局の見学」は放送局を見学した見学記である。放送局施設の設備や様子が説明される。スタジオ、調整室、マイクロホンなど、放送に関係する語の習得が想定される^{註8)}。小単元(3)「ことばの音」は、4年生全員が講堂で「ことばの音」という放送

を聞き、言葉は、44音の組み合わせからできていること、濁音、拗音、アクセントについての話であることから発音発声の学習が想定される^{註9)}。

5. まとめ ― 世間教育とコミュニケーション教育

ここまで見てきたように、国語科における話し言葉教育を推進しようとしていた柳田国語科にとって、ラジオという新しいメディアは、実践のための重要な教具のひとつとしての役割を担うことになった。本教科書では、ラジオを使って、コミュニケーション教育をどのように具現化しようとしたのか、カリキュラム、指導内容、指導方法の3点から集約する。

第一に、カリキュラムとして国語科単元学習が意図されている。単元「ラジオ」は、指導書によれば「学校放送」という単元学習を想定した教材である。3つの小単元からなる構成とその内容は、他教科との連携を含みながらも、基本的には国語科教科内で完結する単元学習が想定されている。他教科との連携よりも、ラジオ放送の聴き取りや話し合いなど、話し言葉の学習を重視することで、話すこと・聞くこと（話し言葉教育）と読むこと・書くこと（文字言語教育）との連携が意図されている。ラジオを聞き放しせず表現（書くこと）につなげている。この点は、第三に述べる指導方法の改善と連動するものである。国民学校期カリキュラムが「話し方」を置いたものの実質的には文字言語教育に偏っていたのに対し、国語科カリキュラムに音声言語教育を位置付けようとしている。

第二に、指導内容の拡大がみてとれる。指導書では、本単元はラジオの教育性に着目するもので社会科的教材に分類される。教材本文は、ラジオ放送を聞くという国語科の学びは教室内にとどまらず、子ども達の実際の学校生活や社会生活に結びつける内容となっている。また、聴者に共通の話題を提供するというラジオの特性を生かして、家庭内での異年齢者間の交流を実現するものとなっている。そのほか、放送に関する学習を通して、書くことの文章ジャンルに台本や脚本を加えている。

柳田（柳田・和歌森、1953）は、明治以来の近代教育が子どもの実生活に意味ある効果を発揮できず、世間ばなれの弊害を生んできたことを指摘した^{註10)}。本単元は、子どもの学びの材料を広く社会の中に見出していくことで、子どもと社会（柳田の言う世間）を結びつけるものとなっている。

第三に、指導方法改善の方向性を示すものとなっている。具体的には次の5点が挙げられる。

① 本教材が想定するラジオの音声を実際に聞きとるという学習は、話すことに関して書かれた教科書本文を読むことで、話すことの学習をするという方法とは異なり、より臨

場感がある。その意味において、読むことで学習するというのとは異なる有効性が得られると考えられる。

② 放送を聞きとる場合にも、読むことと同様に、聞き取るべき要素があることを具体的な例を提示して示した。

③ 教科書掲載の本文が模範例として示されているように、ラジオで放送される話し言葉も話すことの模範例として示されている。

④ 話すことを不得手とする当時の子ども達の実態に配慮して、「鉛筆筆談」という創意工夫ある指導方法が紹介されている。

⑤ 聞くこと（聞き取り）⇒話すこと（話し合いや対話）⇒書くこと（作文）
という具合に、話せるようになることで、自分の思うことを自在に書けるようにするために、話すこと聞くことの学習から書くことへの学習へと段階を踏まえた指導計画が示されている。

註)

- 1) 1 年上（プレプリマ）中（プリマ）下（ファーストリーダー）巻、2～6 年の上下巻計 13 冊である。1947～49（昭和 22～24）年の編集期間を充て検定二年度（1949（昭和 24）年）に出願するが 4 年下、5 年上が検定不合格のため 25 年度用として 1, 2, 3, 6 年を発行、翌 1950（昭和 25）年全巻が完成する。

「あたらしい こくご 一ねん」上

「あたらしい こくご 一ねん」中

「あたらしい こくご 一ねん」下

「あたらしい こくご 二ねん」上

「あたらしい こくご 二ねん」下

「あたらしい こくご 三ねん」上

「あたらしい こくご 三ねん」下

「新しい国語 四年」上

「新しい国語 四年」下

「新しい国語 五年」上

「新しい国語 五年」下

「新しい国語 六年」上

「新しい国語 六年」下

本教科書の関連資料として、教師用指導書である『「新しい国語」学習指導の研究』各学年上下巻及び『新しい国語（小学校）カリキュラム試案』がある。『新しい国語（小学校用）カリキュラム試案』（発行年等未確認）による単元「ラジオ」の編成は次の通りである。

単元「ラジオ」(3 年下) 10 月の編成(『新しい国語(小学校用)カリキュラム試案』による)

題目		ラジオ
言語作品	詩	
	随筆記録	(一) 作文を学校放送で聴取したこと (三) ラジオについての感想や意見
	物語	
	劇	(二) 家庭でのおじいさんとの会話
	ことば	
言語要素	発音(朗読)	会話の読みは性格に出すように読む
	文字	明実国語音楽金魚去年年賀死心配拾終
	語い	うれる, 天気よほう, じっきょう
	文法 修辭	情景をいきいきとうつす表現
言語活動	聞く	ラジオをたのしんでく
	話す	きいたことをわかりやすく話す
	読む	文のよいところをぬきだす — 黙読
	作る	ラジオをきいた感想文をかく
	書く	新出文字を正確に書く — 筆順に注意
学習内容		○学校放送をきいたり, 放送のけいこをしたりきいたことをまとめたりさせる
連絡	社会科	ラジオについてしらべる — 聴取の調査など
現場参考資料		放送番組 放送局の写真
学習活動	予定(時間)	導入 ① 学習の展開と発展 ② 評価 ① — (一) (二) (三) とも大体同じに
	導入	① 放送についての話し合い ② 作文の朗読 ③ さしえの観察
	展開	① 内容を調べる — 放送のけいこ ② 教科書を材料にして対話の練習をさせる ③ 感想を書く(映画等についても)
評価	観察	① 見たり, きいたりしたことについて反省するか ② ラジオへの興味
	測定	① 書字力のテスト ② 対話を材料にしてことばのつかい方

- 2) 柳田(1947, 37-38)は, 国語教書監修の後, 新しく社会科教科書を作る際には, 題材として, 衣食住の次に何が大切かという成城学園教師であった柏熊の質問に対し, 次のように述べる。

「……交通でしょう。民俗学の方では, その順序でやっている。交通には精神的な交通と, 物質的な交通とがあるが, やはり初めは物質的な交通ということをやって, それから交際というところにはいつていつた方がよい。その次は, 順序からいって, さつきの節日ということになる。つまりおせつとか, おぼんとか, 年中行事になるわけです。(略) 節日の次には, 私らの方では口の芸術, 言語芸術をあげております。それはいろいろなものに

わかる。歌とか、諺とか、なぞとか、私の方では分類して二部と言っています。その次は三部と言っていますが、しつけとか、心意現象。いやがつてしないこと、拒否すること。大体私の方ではこの三つにわけております。」

- 3) 鶴見（1969, pp. 334-340）は、コミュニケーションとメディアの関係を、「コミュニケーションの乗り物」と題して、新聞（17世紀はじめ）、雑誌（18世紀はじめ）、電気通信（19世紀）、映画（19世紀終わり）、ラジオ（20世紀はじめ）、テレビ（20世紀の30年代）を挙げる。
- 4) 国語教育講座編集委員会による『国語教育講座』（刀江書院、1950-51）の編集方針にその影響が見て取れる。
- 5) [] は文種を示す。教科書の小単元（一）～（三）にはタイトルは設けられていないため、ここでは、以下の「単元の組み立て」（『新しい国語』学習指導の研究（1945、東京書籍）を参考に表記。
（一） 三年生位の子どもによる、学校で、学校放送から聴取した作文の記録、
（二） 家庭で、祖父と前出の子どもによるラジオ放送についての感想や意見を書いた対話文、
（三） （一）（二）を元にして、自分のラジオに対する考えをまとめた感想文
- 6) 『新しい国語』学習指導の研究では、指導の参考として、映画「はちの巣の子どもたち」鑑賞後の5年生による鉛筆対談（S：篠原未都子、U：植松健児による。文集「こみちのこども」より）を紹介している。
- 7) 教科書巻末「学習の手引」では、(1)～(3)は、読後感想の話し合い、内容の読解であり、「(4) あなたがたも、このげきを放送するつもりで練習してみましょう。」とある。
- 8) 教科書巻末「学習の手引」では、(1)は読解、(2)「放送局にかんけいの深いことばを本からさがして、ちょうめんに書きましょう。」とある。
- 9) 教科書巻末「学習の手引」では、次の3つの課題が提示される。「(1)「カキケコ」の五つの音をいろいろに組み合わせて、ことばを作ってみましょう。ことばがいくつできましたか」「(2) 次のことばをちょうめんに書いてみましょう。○二つの音でできていることば。○三つの音でできていることば。○四つの音でできていることば。」「(3) 本に出てくるいろいろの音を正しく言えるように練習しましょう」
(1)と(2)は語彙語句づくり、(3)は発声発音の課題となっている。
- 10) 柳田（1953）は、教育目標を「義務教育終了までに、新聞を批判的に読める素地をつくり、他人に頼らず、自分の力で世間の動向を判断できるようになる一人前の選挙民」の育成とした。

参考文献・引用文献

- ・ 久野収・鶴見俊輔（1969）『思想の科学事典』勁草書房、334-340.
- ・ 国語教育講座編集委員会（1950～51）『国語教育講座 I～VI』刀江書院.
- ・ 成城教育研究所（1947）『柳田先生談話 社会科の新構想』成城教育研究所.
- ・ 柳田国男・和歌森太郎（1953）『社会科教育法』実業之日本社、9-16.
- ・ 渡辺通子（2004）「昭和20年代コミュニケーション概念の導入」全国大会国語教育学会『国語科教育』第55集、20-27.

（2018年11月2日提出）